

【艦これ】 榛名と過ごす鎮守府

ハルのキノナカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

のんびりほのぼのとした日常を過ごしていた

提督 暁ハルと金剛型3番艦榛名は、大本営の元帥か特別任務を言い渡される。

それは日頃の鎮守府の様子を記録してほしいというものであった。元帥の意図が分からないまま、普段の日常を記録する。

そんな中、大本営ではある噂が広まりつつあった…

榛名と鎮守府のみんなとほのぼのする話

目次

ページ1	プロローグ	1
ページ2	艦娘と提督	3
ページ3	我が家	7
ページ4	ケツコンカツコタジユウ	11
ページ5	序列	15
ページ6	正妻	19
ページ7	会議	24
ページ8	演習と謁見	27
ページ9	戦闘	32
ページ10	事件	43

ページ1 プロローグ

朝、日差しの優しい光とともに優しい声が聞こえてくる。

「…と…く…て…いとく」

重い瞼を開けると、見慣れた姿が映りこんできた腰まで届く長い黒髪は、日頃の手入れがよく行き届いているのがよくわかる。

くらい美しく綺麗にまつすぐ伸びて輝いている。

端正な顔立ちに起伏がはつきりとした身体を包むのは

神社の巫女服をアレンジしたデザインの物だ。

まあ、巫女服というにはかなりスカートが短い

頭に大きめのカチューシャをのせた彼女は

お淑やかな笑顔とともに再び声をかけた。

「提督、おはようございます。起床時刻になりましたのでおこしに参りました」

「ありがとう榛名、いつも悪いな」

「いえ、榛名は日頃のお返しをしているだけです」

ニコツと笑いながら布団をすっかり剥がしてくる。

あくびをしながら体を起こすと、窓から母校全体が見渡せる。

「提督、朝食は出来ていますが、今日はどちらで食べますか？」

「こっちで食べるよ、今日は急ぎの物はないからな」

「はい、わかりました。榛名御一緒してもよろしいですか？」

「もちろん、一緒に食べよう榛名」

「はい！ 提督のおそばに！」

俺と榛名は並んで歩き出す。

暖かな日差しが鎮守府を照らしている。この場所を守り抜いた日々と

これからも続く日常。

こんな日々が続いてくれればいいと、願わずにはいられない。

そんなことを考えながら食卓につき、席に座る。

今日のメニューはだし巻き卵と豆腐の味噌汁、納豆にほうれん草の

胡麻和えだ。

いつもながら、榛名の家庭スキルの高さには驚かされる。

俺も料理が出来ないわけではないけれど、榛名ほどおいしく作れなければ

こんなにも手間もかけられない。このほかに洗濯掃除に秘書官の仕事に出撃まで

とてもではないが、人の作業量ではない。そう思いもつとらしくにしていると伝えたことも

あつたが、そのときに言われてしまった。

「榛名が好きで、好きな人のためにやっていることなので」とそれ以来は、やりすぎないレベルで好きにさせている。

つくづく自分にはもつたいたい人だ。

「提督？　どうかなさいましたか？」

「ん？　いやうちの鎮守府もずいぶん大きくなったと思つてね」

俺の様子に気付いたのか、榛名が問いかけてきたので

別の話題を振つて少し赤くなつた頬をごまかした。

榛名はそれに気づくことなく話題に乗つてくれた。

「そうですね、あれから何年になるんでしょうか？」

「5年かな、君とケツコンしたのが4年前だ」

「そんなにたっているんですね、もつと最近のことだと。」

「俺もそう思うよ、色々あつたから」

そういつて俺は、この鎮守府に配属された時のことを思い出していた。

ページ2 艦娘と提督

艦娘

その存在と誕生についてはいまだに謎に包まれている。

7年前に発生した深海棲艦と言われる。未知の生物兵器によって人類は窮地に立たされた。

既存の兵器は通用せず、某国による核攻撃でさえも決定打とはならなかった。

そんな中、深海棲艦と同時期に発見され、保護されていた者たち彼女たちこそが、のちの状況を覆し世界を救った少女たち

「私たち艦娘の存在ですね」

榛名は食後のコーヒーを入れながら俺の解説に捕捉をしてくれる。普段通りの甘いコーヒーを飲みながらこれまでの振り返りをおこなう。

「ありがとう榛名、すっかり俺の好きな味が分かるようになったな」
「4年もいれば覚えて当然ですよ、それよりも急にどうしたんですか？」

「改めて、これまでに何かあったか確認しておきたいんだよ。元帥からの特殊任務もあるからいい機会だと思ってるね」

「特殊任務ですか？」

「ああ、それについてはまた後で説明するよ」

艦娘の登場により、深海棲艦にたいして有効的な手段を手に入れた人類は各地での

戦況を好転させることに成功し、今現在においては安全に生活ができるようになった。

深海戦艦の出現とともにその存在に対抗するように現れた艦娘については

各国の研究機関が莫大な予算とともに時間かけて少しずつ究明されてきた。

彼女たち【艦娘】はその名の通り艦隊が人間の少女の体をもった存在である。

研究の結果、彼女たちは普通の人間と変わらず生活することが判明している

そんな彼女たちが人間と違う点は、兵器としての性能を持つことだ。

【艦装】と呼ばれる装備を身に付け、深海棲艦と戦う彼女たちはまさに人類の守護者として

人々のために思っで戦う。

しかし、大きな力を持つ彼女たちが人類にいつ牙をむけるかわからない。

そう判断した世界各国の首脳陣は

彼女たちを管理し研究を進めるための機関を作ることを決めた。

艦娘とともに最前線の港にて人類を守る砦 【鎮守府】の誕生だ。

鎮守府は深海棲艦との戦いのほかに

鎮守府の役割は艦娘たちの生活環境の場所を作ることと、艦装の管理開発だ。

【妖精さん】といわれる艦娘のサポート役を担う彼らと連携することで

新たな艦娘の建造や兵器開発を可能にしている。

艦娘の管理に妖精さんで行う新兵器開発と研究。艦隊運用と深海棲艦との戦い。

それらすべては当然、人間が行はなければならない。

そのための存在が【提督】という鎮守府の最高責任者だ。

提督というのは学歴だけではけしてなれない立場だ

知識に精神、健康診断の精密検査に思想や思考

さらには家族構成や友人恋人の人間関係まで徹底的に調べられる。

それも当然だろう、もし採用した人間が裏切りでもしたら人類は深海棲艦さえ屠る最強の力を

今度は、わが身に受けることになるのだから

そうならないように徹底的に調べつくされ、人類への忠誠心と家族恋人を人質にされる。

その管理支配を徹底するために、鎮守府は大きく二つに分けられ

る。

元帥、大将クラスの最高位の階級持ちの中でも国に認められた者たちで構成される

【大本営】

そのほかの提督たちが属する、鎮守府だ。

大本営が最前線での式と作戦を決め、それを鎮守府に伝達する。シンプルなこの上下関係が提督たちの反抗心を抑えている。

大本営にはこれまでの作戦行動で、最大戦果と貢献を果たしている猛者ぞろい

ちっぽけな鎮守府がかなうはずもない。

水底からやってきたとされている深海棲艦

それにたいして対抗手段を持つ、艦娘と妖精さん

それを管理監視する、大本営と鎮守府に所属する提督たち

今、世界の中心となっているものはこんなところだろうか

提督就任時に元帥様からいただいた言葉を何とか思いだしながら説明を終えると榛名が首をかしげながら控えめに聞いてきた。

「あの、提督ご質問してもいいですか」

「ん？なんか違ってたか？まあ大分うる覚えだし正直俺は興味ないから」

「いえ、説明の間違いではなくそもそもその疑問が残っているのが気になっちゃって」

「疑問？わからないところってことか？」

「はい、私たち艦娘の正体と深海棲艦についてです」

「ああ、そこか…」

なるほど、確かにこまかな説明は省いた気がする。

「そのことなんだけどな実はまだ判明してないんだ」
「え。」

「なぜ艦娘が人とほとんど変わらない構造をしているのか。

なぜ、女性のみなのか。

どうして深海棲艦とともに現れて、奴らに対抗する力をもっていたのか。

そもそも深海棲艦とはなんなのか。

非合法、非人道的ではあるが、戦後の解剖も行っているにも関わらずに

その正体も存在の根幹もなにもわからないんだ」

俺の言葉に榛名は驚いて聞いてくる。

「ま、まっってください!!戦後の解剖ってまさか深海棲艦だけでなく…」

「そうだ艦娘もその対象にされたらしい」

「らしい?」

「この話はそもそも大本営の中でも限られた人物しか知らない

だから俺も聞いた話しか知らないんだよ」

「どうして提督がそんなはなしをご存じなんですか」

「お前がそれ聞くの?俺が向こうの元帥殿と仲良くなった理由はきみだろうか?」

「あ… そうでした… あはは」

「やれやれ、まあだからこんなへんな任務が来るんだろうな」

そういつて上着の内ポケットから一通の手紙を出した。

裏には、宛先と送り主の元帥殿の名が、表には特殊任務の文字

中身の手紙の題名にはこう書かれていた。

鎮守府記録任務について

暁 ハル提督殿

貴君の活躍は相変わらず大本営の中にも轟いているので
壮健であることは確認するまでもないな。

さて、さつそく本題について説明させてもらうが、なに難しいこと
ではないよ

題目に書いている通り、貴君には鎮守府の様子をビデオで撮影し
それを続けてほしいのだ。

理由や目的については、この場で話すことができない。

どうしてもという場合においては大本営まで私を訪ねてくるとい
い。

この手紙とともに自立撮影型デバイスを手配したから、業務に支障
は起きないはずだ。

最後に、ほかの鎮守府ではこれは行われていないので、極秘扱いと
し管理するように

以上で作戦説明は終了だ。 貴君にが暁の水平線に勝利を刻むの
を願う。

追伸

そろそろ戦果集めを真面目に行うように、元 元帥君

「… ビデオと戦果集め… ですか」

「最初のほうは命令だからやるけど、戦果集めはめんどくせえな」

俺はあくびしながら、食卓近くのベランダに行きライターで手紙を
燃やした。

それをみた榛名が慌ててコップに水を入れてベランダに来た。

「提督！急に燃やさないでください！やけどしたらどうするんですか
！」

「あ… 悪い、極秘扱いって話だからすぐ燃やした。」

「もう…心配かけさせないでください!!榛名は提督のお嫁さんなんで
すから

何かあったら大泣きしてしまいますよ!!?」

「ごめんごめん、次から気を付けるよ、これで許してくれ」

そう言つて頭に手をのせて、美しい髪を乱さない程度にやさしくな
でる。

そうすると、榛名は、大人しくなつていき顔を赤くする。

「ずるいです、そうやってなでればごまかせるとおもつて。」

「じゃあやめる?」

「…このままでいいです」

赤い顔をパイッと背ける榛名だが、その口元は嬉しそうに弧を描い
ている。

ケツコンしてから初めて榛名はわがままや意地悪なことを

言つてくれるようになった、二人で時間をかけてゆっくりと打ち解
けてゆき

ときにはケンカしながらもこうしていつしよにいる

普段秘書官としての榛名以外にもこんなかわいい榛名が見れるの
だから幸せだ。

この笑顔が好きで一緒にいるんだと思うと少し照れ臭いけど
心底惚れていると思う

俺はなでながら榛名の耳に口を寄せて思いを告げる。

愛していると

プリン基地、それが俺こと暁 ハルの任された鎮守府である。

提督歴は五年となり黎明期から少し経った頃に学生時代の親友に
誘われて

採用試験を受けたところ、奇跡的に合格しこの基地に配属された。

深海棲艦との戦いはもちろんわかっていたが、一つだけ嫌なところ
があつた

艦娘たちが兵器なのはわかっていたが、彼女たちには心があり意思
があつた。

そんな彼女たちにはとても兵器には見れなかった。

だから俺は大本営の決定とは違い彼女たちを人間として扱い、とも
に過ごした。

もちろん大本営と確執を持つことになったり、厄介な事件に発展し

たりもしたが

なんかかんやで解決し、今は穏やかに過ごしている。

俺と榛名は夫婦として一緒に暮らしている。

もちろん同じ部屋でという意味だ

鎮守府は大きく三つに分けられる。

提督執務室と研究棟が一緒になった、業務棟

艦娘たちの住む、住居棟

そして戦闘、修復のための出撃棟だ。

提督室の隣は俺と榛名の住居となっている。

もともとは、限定海域攻略時の寝泊まり部屋

だったのだが、改造した。

俺たちは今その部屋で朝食をすませて、提督室に場所変えた。

「戦果集めねえ、はあ…やる気でねえ」

「そんなに嫌なんですか？第二改装を待つ子たちも多いですから

やる気はあるんだと思いました。」

「確かに、改装待ちのみんなのために頑張るつもりはあるけどさ

問題は元帥なんだよ。」

「元帥さんが問題なんですか？」

「俺はうちの艦隊及び鎮守府の練度と規模拡大の時期に、死に物狂い

で

演習したり、近海から西方海域まで攻略しただろ？」

「はい、榛名が秘書官と第一主力艦隊の旗艦を務めていたときです

ね。」

「あの時はの活躍を知っているんだよ、たった一か月の元帥期間を」

「あーそれですか」

「そういうことだ、ったくめんどくせえ」

「フツ提督らしいですね」

「だってめんどくさいんだよ。元帥になると下の面倒から

大本営直属だから命令絶対だしそれに何より」

俺は提督用の椅子に座ったまま、窓から鎮守府を見下ろす。

「みんなと暮らしてのんびりするのに余計な権力はいらねえよ。」

「そうですね」

そうして俺と榛名は二人で笑いあつた。

ページ4 ケツコンカツコタジユウ

「さて提督、今日もお仕事を始めましょう」

「そうだなあまず記録係を決めないといけないな、誰にしよかな」

さっそく記録係について榛名ときめていると、朝八時ちょうどに執務室をノックする

音が聞こえてきた。

「てーとく、ヴェールヌイだ」

「ヴェル、入っていいぞ」

入室を促すと、セーラー服に身を包んだ少し幼い銀髪の少女が入ってきた。

彼女はヴェールヌイ

輪が鎮守府の艦娘寮の駆逐艦寮代表だ。

「駆逐艦寮、点呼及び朝礼終わったよ」

「ありがとう、ヴェル」

「これくらい当然さ、仮でもお嫁さんだからね」

「ありがとうございます。ヴェルちゃん」

「榛名お姉さん、おはよう。今日も提督を起こしてあげたのかい？」

「ええ、提督は朝起きるのだけが苦手ですから」

「フツツ相変わらず見たいだね」

そういつて口元に左手を持ってきて上品人笑う二人の左手には

薬指に同じ鈍色の輝きがあった。

ケツコンカツコカリシステム

俺の嫁は榛名だが、そうなるにはある種のきっかけが必要だった。

艦娘という人間では決してかなわない強大な力を持つ艦娘たちがだ
がしかし

その心は人と変わりはない

そんな少女たちが人間と同じような感情が芽生えるのは、必然だったのだから

鎮守府制度が動き始めて、初の限定緊急海域の攻略が終盤に問題が起こったのだ。

駆け落ちだ。

艦娘と提督

立場どころか存在からして違う者同士が恋をして

鎮守府の外側に出てしまうという、大問題が起きてしまったのだ。

まあ、今だからわかるが愛する人のためなら世界でも敵にしてしま
うのが

心を持った生き物というものだ。

この事件で一番大変だったのは、その駆け落ちが起きた鎮守府その
ものが

駆け落ちした二人の味方だったことだ

鎮守府ひとつが暴走するという、前代未聞の事態にさすがの大本営
も対応に困った。

なにせ海で可憐かつ熾烈にたたかう艦娘の存在は世間に知れ渡っ
ている。

しかもその全てが容姿の整った者たちだ。

もし大本営が厳罰を下し、駆け落ちした二人が離れ離れになろうも
のなら

世間を敵に回す。

そこで取られた対策が、ケッコンカッコ仮システムだ。

大本営が作った指輪により、大本営責任のもと艦娘との関係を認め
るというもの

もちろん正式な結婚ではない、いわば鎮守府だけの関係だが、艦娘
たちはそれで納得してくれた

こうして駆け落ち事件は終息したが

その数日後に新事実が発覚した。

カッコカリ後の艦娘はさらなる練度の向上が確認されたのだ
研究はされ続けているが、詳しい理由はわかっていない

愛ゆえにか指輪の力か

いずれにしろ、限定海域の攻略難易度に頭を悩ませていた大本営は
正式に全鎮守府にカッコカリシステムを通達

練度向上を後押しした

それぞれの鎮守府に一つ配ったが、金銭取引による指輪の購入も可能だ。

俺と榛名の馴れ初めはおいおい語るとして

榛名とはその最初の指輪でケツコンを果たした。

そしてヴェールヌイと他のケツコン艦娘の物は金銭購入だ

男女の関係においてやはり指輪というものは特別なものだ

わが鎮守府におけるケツコン基準は双方の意思の尊重によるもの

そこには当然、恋愛感情もある

そうした思いを踏まえたうえで、このカツコカリのケツコンを行っている

ヴェールヌイは二番目に俺とケツコンした艦娘として駆逐艦ながらも

鎮守府内の序列へ俺はよく知らないが、第2位として君臨している最古参である。

「てーとくが朝からのんびりせずに仕事してるなんて珍しいね」

「ヴェル、俺がいつもさぼってるみたいない方はやめなさい。」

「だって、榛名お姉さん」

「提督が仕事に励むときは、予定があるときか本当に真剣な時だけです」

普段から励んでいる姿なんて限定海域攻略のときだけです」

「味方がいない!？」

なんてことだろう、こんなに頑張っているのに

「それでてーとくが朝から仕事しなきゃいけないようなことはなにかな?。」

「こんな仕事だよ」

今朝届いた指令書をヴェルにもみせる。

「なるほどね、それならちようどいいのがあるよ」

「ちようどいいのですか?。」

榛名が首をちよこんと傾げながらヴェルに聞き返す

ちようどいい? 記録にちようどいいものなんかがうちの鎮守府にあつたか

記憶を呼び起こそうとしているうちにヴェルが執務室から出ようとしていた

「じゃあとっってくるから二人はお仕事しておいてねまたあとで」

「あっおいヴェル」

「・・・いってしまいましたねヴェルちゃん」

「つたくしようがねーな」

「お仕事しますか？」

「そーだな、はやめにかたづけるか」

「はい！ではまず昨日の資源調達から」

朝が動き出す合図の定期報告とヴェルの駆けていく音が鎮守府になった。

ページ5 序列

榛名とともに仕事をこなしているうちに時間があつという間に過ぎていく

「提督、午後の演習よていですが、本当に榛名はいかなくてよいのですか?」

「ああ、まだ上限に達していないとはいえうちの艦娘のなかではトツプ

それも次の奴とくらべて40も差があつたら十分だろう」

「わかりました、ではいつも通り練度向上を優先させます」

「ああ頼んだ、ふうこんなところかな? 一回休憩にしよう」

「はい、榛名お茶をいれてきますね」

執務室からとなりの住居へお茶を用意しに行く榛名を見送りながら首を

まわすと、小気味いい音が鳴った

「デスクワークは楽だが肩がこるな、目も疲れる」

そうやって目をとじて大きく伸びをして体をほぐす

午前の一通りの仕事が終わった

あとは午後からの会議に出席してしまえば終わりだ

これが一番めんどくさいが組織に所属している以上はしかたない

はあとため息をついていると

「提督、入ってもよろしいですか」

「ん、ああかまわない」

淑やかな声とともに入室してきたのはまつすぐに伸びた銀髪のを

揺らしながら儀式服に短めのスカートに豊かな肢体を収めた少女だった

彼女は翔鶴

五航戦の空母にして艦娘寮空母長だ

彼女ともケツコンしており序列は第4位となっている

「空母寮は異常ありませんみなさんで修練に励んでいます。」

「そうかありがとう、いま榛名がお茶を淹れてくれているんだが一緒にどうだ？」

「では、いただきます」

そう言っつて応接対応のソファに腰掛ける

榛名が可憐な和風美人なら、翔鶴は美しい和装美人といった感じでも眼福だ

「空母たちはなかよくしているか？」

「はい、提督の計らいのおかげもあり、私たち五航戦と一航戦の先輩方とはなかよく

しております」

「本当か？翔鶴は遠慮癖があるから心配かけまいと嘘をつくときがあるからな」

「それは」

「提督、お茶がはいりましーあれ？翔鶴さん？」

「榛名さんすいませんお邪魔しております」

「榛名、翔鶴の分も淹れてあげてくれ」

「はい、わかりました」

榛名は執務室にいる翔鶴に驚くこともあまりなく

お茶の準備を進めていく

全員分のお茶を淹れ終わると、榛名は翔鶴の対面にすわって話に混ぜた

「なんのお話をしていたんですか？」

「翔鶴が俺に嘘つくよなっていう話さ」

「提督！それは誤解です！私はただ」

「ただ提督の迷惑と心配をかけないようにするために

ですよ、翔鶴さん」

「は、はいそうです榛名さん」

「提督、翔鶴さんは真面目なんですからあまりからかわないように」

「う、すまない翔鶴。少しやりすぎた」

「い、いえ私も冗談なのはわかっていたので」

榛名にジト目で怒られた俺は素直に翔鶴に謝罪した

うちの鎮守府では一夫多妻制にはなっているが、その実態は正妻榛名のもと

ちゃんとう統治が行われている

最初はもちろん榛名自身も俺も互い以外の相手を認めるつもりはなかつたんだが

艦娘側の猛攻にいよいよ榛名が先に根をあげたのがきつかけらしい

らしいというのは、俺も後から知ったからだ

2番目の嫁になるヴェルを連れてきたのはほかでもない

榛名自身だからだ

榛名自身もそうだったように、提督の人柄に施された艦娘は多く

なによりも同じ艦娘、そして同じ人を好きになったもの同士として自身が結婚相手として選ばれたことによつて諦め、涙を流す艦娘を見ていて

自分がその立場だったらと考えるしまったことが決定打だったよ
うだ。

そうして自身の独占欲や嫉妬を押し殺して、多重婚を許すことになつたが

提督側にはたとえ榛名が我慢するといつても納得できない理由があつた

それかまさに榛名を愛していたからだ

提督は惚れた相手を一途に思い、ほかの艦娘の気持ちをきつぱりと拒絶してきた

それが急にほかの艦娘を連れてきて結婚してもいいというのだ

榛名に何かあつたんじゃないかと、知らずのうちに傷つけてしまつたのじゃないかと

提督は恐怖した

どうしてと聞く提督に榛名がこういつたという

「榛名も当然、提督を独り占めしたいです。」

でもそれは選ばれなかつた子たちに対しての後悔にもなるんです。

もし榛名が選ばれなかつたとしたら、あの子たちと同じように

泣くと思うんです。だからわたしは傲慢でも自己満足でもあの子たちにも同じ幸せを感じてほしかった
たとえ提督の愛が減ってしまっても」

あのとときの榛名が見せた顔は一生心に残るだろう

そんな榛名を抱きしめて、誓いの言葉を口に出してから
俺の覚悟も決まった

ヴェルや翔鶴ほかの艦娘との結婚を行うようになった

この一連の鎮守府多重婚騒動はのちに

〈鎮守府嫁艦序列事変〉として記録された

暁ハル提督が嫁にしている人数は10人
現在時点で10人というだけで、これからも
増える可能性がある。何しろケツコンしておらず
レベルの上限に達している艦娘がすでに20人近くもいるとなれ
ば

増えることを考えるのが自然だ。

ましてその理由が単純な色狂いというなら、正妻の榛名も遠慮なく
提督を絞れるのだが、理由が艦隊強化と思いに答えるためならばと
多少、黙認せざるをえないわけである

あくまでも多少。だが

「榛名さんにはいつもご迷惑をおかけしています」

「気にしないでください、翔鶴さんすべては提督の責任で

それを管理するのが私の役目ですから」

「榛名にもいつも迷惑をかけている。すまない」

「そう思うのでしたら、少し自重してもいいんですよ」

「うぐ、それは……」

「知ってます、そうさせたのはわたしですが、嫉妬が消えたわけじゃな
いと

「お伝えしたかっただけですよ」

「そう言っただけほほ笑む榛名には少し悪戯したかったという

思いが瞳に隠されている気がしたから

「俺も苦笑いで言葉を返す

「そうだね、みんな榛名には感謝してるよ。ありがとう」

「そうだった俺と榛名のやり取りが面白かったのか翔鶴はくすくす
と

「笑いながら榛名が入れたお茶を飲む

「フフフ、本当に提督は榛名さんがお好きですよね」

「そりやもちろん、榛名がいなければ俺は何度刺されて死んでるか」

「10人のお嫁さんですからね、榛名さんが正妻として治めてくれな

ければ今頃」

「あー！やめてくれ想像したくない！」

そういつて頭を抱える俺をみて翔鶴と榛名はお茶を飲んで
なごやかな休憩を過ごしている

「提督、戦艦寮の午前の演習報告と午後の予定確認ですが……あら
？」

執務室に入ってきたのは、超弩級戦艦としてもっとも有名な艦

大和だ

改造セーラー服に短めのスカートに包んだ体は超弩級戦艦にふさ
わしい

グラマラスな造形だ。

少し赤みがかった長い黒髪を高い位置でまとめてポニーテールに
している。

彼女はわが鎮守府の最大戦力だ

限定緊急海域の最終海域攻略のときはほぼ必須の人材だ

その火力と装甲には多くの艦娘が助けられている

そんな実績とそれなりに彼女に好意をもっていたこともあり

大和ともケツコンをはたしているが、彼女の場合は特殊な事情が
あった

「ああ、ありがとう大和」

「提督に榛名さんはいつもとして翔鶴さんも？これはいつたい」

「提督と休憩にはい入ったときにちょうど良く翔鶴さんがいらっしや
います」

一緒にお茶を飲んでいたんです」

「なるほど、提督のサボりではなかったんですね」

「ちよ、なん」

「はい、大和さんもどうですか？」

「いえ、私はすぐに戻らないといけないので」

「そうですか、ではまたの機会に」

「はい！そのときはぜひ誘ってください」

俺の訂正の声を無視して大和と話す榛名

なに、俺嫌われたの？

恨みがましく榛名に視線を送ると、それに気づいた榛名が
てへっというかのように小さく舌を出しながら片目を閉じた
くそ、俺の奥さんかわいい

かわいいから許そうとお茶をのんでから大和に本題を聞き出す
「ところで大和、ここ一週間の戦艦寮の給食量なんだが――」
ガチャ、バタン

音が気になって顔をあげると、いつの間にか大和が
退出していた

まるで逃げるかのように

俺はまたいつものかため息をつくとすぐに支持を出す

「榛名、翔鶴。悪いが今さつき逃げた大和を捕まえてきてくれ」

「はい」「わかりました」

二人はすぐに立ち、追いかけてようとするが

「その必要はないじゃーん」

「アドミラルさん、捕獲完了ですっ」

扉を開けて入ってきた二人によって大和はしくしく泣きながら

捕獲されてきた

「てーとく♪重巡寮、午後の予定確認にきたよ」

「海外艦寮、問題ないよ」

「ありがとう鈴谷、プリンツ」

鈴谷と呼ばれた少女は高校生のブレザーを着た透き通った色の薄
緑色のロング髪の毛の

JK艦娘だ、重巡洋艦の艦娘代表で次期嫁艦最大候補だ

プリンツは海外艦で、長い金髪を二つのおさげにしてまとめている
恰好は母国由来のドイツ風の衣装で少し体のラインが分かりやす

い服だ

彼女は海外艦の代表で序列3位の嫁艦だ

「悪いな、来た瞬間にうちの燃費問題がでてきて」

「いいよー鈴谷全然気にしてないしまたかーっっておもったくらい？」

「あははーヤマトは相変わらずだねー、いい加減しないとアドミラー

ルさんに

出禁にされちゃうよ?」

「それは嫌ですけど!・どうしてもおなかがすくんですう!」

そう大和とのカツコカリの特殊事情とはまさにこのことだ

彼女の資材の消費量は全艦娘トップだ。

カツコカリすることにより

その燃費を1割も抑えて運用できるならと

彼女好意とともにケツコンしたというわけだ

「まったく・・・お前は何回同じことを繰り返せばいいんだ?」

「申し訳ありません!」

「お前と赤城がその力の代償と言わんばかりに大量の資材が必要なのは

俺も理解している、だから許可さえとれば問題ないと伝えたのにお前たちときたら」

「担当、そのあたりで許してあげてください」

俺がお説教に入る寸前に榛名からストップが入った

「大和さんも悪いというのはわかっただけで逃げたわけですから

ここは榛名に任せてください、きちんと言っただけで聞かせますから」

「だけどな?・これで何十回目になるし、何よりこうして

お前にまかせても何度も繰り返すわけだから」

「提督、どうかお願いします」

シャランと長い黒髪を垂らしながらまっすぐ頭を下げる榛名

そんな榛名をみて俺はやれやれといいながら許しを出す

「わかった、大和は任せるよ」

「ありがとうございます、提督」

そういうと榛名はさっそく大和の首根っこを捕まえて

連れていく

「さあ、行きますよ大和さん」

「え?榛名さんどこに行くんですか?」

「もちろん、お仕置き部屋ですよ?」

につこりとほほ笑む榛名に、大和は顔を青ざめる

「え、え、い、今まではつまみ食いなんてなかったのに」

「あなたの今回の件はつまみ食いだけではないでしょう？」

「!、それは」

「だからですよ、あれだけ全員に言っ·て·き·か·せ·た·の·に·」

「い、いやあああああああああー!!!」

バタンツ!

悲鳴とともに二人は執務室からいなくなった

「大和さん、榛名さんを前によくもあんなあからさまな・・・」

「マジヤバー・・・」

「ワオ、ヤマトはアグレッシブだねー」

残った三人はそれぞれ感想を言いながら、お茶をすすっている

「まあ、榛名をそこまできついことはしないだろうさ」

「そうですね、あくまで警告という感じがしますから

極端に恐ろしいことはないと思います」

「思いたい?なんでそんな言い方なんだ翔鶴」

「それはですね」

ガチャ

音のした方向を見ると、半分だけ顔を出した榛名が

俺からはよく見えない角度で三人を見ていた

「みなさんも変なことは考えないようにしてくださいね・・・?」

「二はい、もちろんです」

そう忠告をつけるとドアをしめてこんどこそ

大和を連れて行った。

忠告された三人はすごい勢いでうなずくと

執務室の掃除とか片付け、担当寮の仕事を始めた

肝心の提督はというと

「ははは、さすが榛名しつかり管理してるなあ」

この一連の流れをしつかり理解していて

榛名に感謝の念を送っていた

ページ7 会議

「大和さんも懲りたようなので今回は良しとしましょう」

「榛名、やりすぎにだけ注意してね」

「はい！榛名は大丈夫です！」

「ここでそのセリフは聞きたくなかったなあ」

大和のお仕置きが終わった榛名が戻った執務室は、現在

提督・榛名・大和・翔鶴・鈴谷・プリンツ・ヴェルヌーイ

合計7名が集まっていた

最初は大和が帰ってきた段階で全員帰ろうとしたのだが

俺が呼び止めた

元帥からの指令について相談しておきたかったからだ

「これが今回の指令内容になるわけだが、どう思う？」

「そうですね、今回は特に意図が分からないため軽率な行動は控え様子を探ることから始めるべきだと思います。」

「だねー。あのおじさんの考えていることだから提督に

何かしてほしいのは間違いないっしょ」

翔鶴と鈴谷がそう発言すると、ほかの艦娘も頷いた

「なるほどな、大和、ヴェルお前たちはどう思う？」

「私が最初に持ってきた鎮守府独自のカメラで元帥からもらった物とは

別に鎮守府に異変がないか記録しておくべきだと思うよ」

「そうですね。大本営に提出できる用のものと最悪に備えて

鎮守府専用の記録カメラで映せないような場所も記録しておく

こうしておけば証拠にも原因把握も早くなりますね」

「ふむ・・・貴重な意見をありがとう。」

榛名、君の見解を聞いてもいいかな」

「はい、わかりました」

俺にこたえるように榛名は全員を見渡すと話を始める

「今回の元帥様からの依頼は2つ

ひとつは戦果集めの積極的参加を促す檄文

そしてもう1つがこの鎮守府の監視記録という今までにない指令です。

この監視記録がどんな意味を持つことになるかわからない以上、不用意な行動を起こし

提督の立場が危うくなるのは1番してはいけないことです

なのでヴェルちゃんの言う通り鎮守府独自の記録媒体を用いて秘密裏に記録し

証拠獲得に専念しておくべきという結論になると思いますが

みなさん、このほかに意見があれば隠さず述べてください」

ここで榛名は深呼吸をすると、先ほど以上の強い瞳と意思を持って続きを始める

「私たち艦娘の役目は人類の守護。となってますが実際はそんな

あやふやで大雑把なもののために命は捨てられません。

少なからず、ここにいるメンバーは人類ではなく提督という1人の人間のために

命を懸けられる人たちです。そんな皆さんにお願いします。

どうか、どうか私たちの提督のためになることなら、提督が笑って暮らしてくれるなら

私は何でもするので、皆さんの力を貸してください」

深々と頭を下げる榛名にほかの艦娘メンバーは大慌てで話し始める

「ちよ、マジ！榛名さんやめてよ！榛名さんにそんな風に言われたら私たちは喜んで協力するから！むしろ私たちの頭が上がらないから!!」

鈴谷の言うことに、ほかの艦娘たちも頷く

そんなみんなをみて榛名はついに涙ぐみ

余計に慌てて宥めるみんなの姿を見ていて俺も改めて覚悟が決まった

【この光景のためにも、みんな、そして何よりも榛名のためにも

やはり問いただす必要があるな。そのためなら俺は・・・】

そう、俺は、、、あのときもおなじように

「提督！榛名さんが泣き止みません！助けてください！」
翔鶴からの呼び声で意識が戻った俺は榛名のほうに視線を
動かすとヴェルとプリンツが懸命に宥め、大和と鈴谷が
何事かと執務室に顔を出した艦娘たちに事情説明をしている
そんな光景がおかしくて愛しくて、俺は笑いながら榛名の頭をなで
るために
歩き出した。

ページ 8 演習と謁見

「すみません提督、取り乱してしまっ」

「いいから。今は楽にしてくれ」

あのあと

泣きじやくる榛名を10分間くらいヨシヨシしたことで

落ち着きを取り戻し、甘えモードに入った榛名にだっこを

要求され、現在向かい合わせでだっこをしているわけだが俗にいう

これはだっこではなく間違いなくハグだ。

大人にわかりやすくするなら対面

「アドミラルさん、banされるよ」

「おつと」

いけない、うれしさのあまり営みに励みそうに

なってしまった

そんなハグしている俺たちをほかの6人は

うらやましそうに見ている。

その視線には気づいているが、今は榛名が優先なのでスルーだ

「この状態で続けるのもおかしいとは思いますが、先ほどの榛名の

まとめはどうだ？俺としても現段階でとれるベストだと思うが」

「はい、私たちもそれで構いません」

「大和の発言に異議はないな？」

念をいれてそれぞれに視線を送ると頷く姿が見えた

「よろしい、では今後の方針はこれで決定する、呼び止めてしまっ」

悪かったな各自、持ち場にもど」

「提督さん!!!」

慌てた声とともに執務室に入ってきたのは

銀の髪をツーサイドにまとめた二十歳くらいに見える女の子

起伏のしっかりした身体を包む教官服のようなものは身体に押し

広げられて

大変なことになっている。

彼女は練習巡洋艦の鹿島

わが鎮守府の演習統括者という重役だ

そんな彼女が慌てた声とともに入ってきたということは

「どうした鹿島？トラブルか」

「演習場に元帥様がお見えになつており、わが艦隊との

演習をしたいと申しています！」

「はあ・・・やっぱりか、鹿島。」

元帥殿にはわが艦隊最高戦力でお相手すると伝えて、準備してもらつてくれ」

「はい！鹿島にお任せください！」

鹿島に指示を出して、掛けてあつた提督帽を被つて身なりを整える

「榛名、準備を頼む対深海棲姫用機動部隊、戦艦随伴部隊で行く」

「はい！榛名！出撃します！」

「翔鶴、急いで妹を呼んできてくれ姉妹で嫁にしたんだから

ここにその力見せてくれ」

「わかりました！五航戦の力をお見せします！」

「残りは鈴谷、ヴェルお前たちにも出てもらう、ヴェルは雷撃夜戦装備

鈴谷はいつもの昼夜兼用装備でいい」

「オツケー！鈴谷にお任せ！」

「信頼の名は伊達じゃない」

「プリンツ、お前の姉さまにも出てもらう、今回は火力と手数で殲滅する」

「了解！すぐに知らせるね！」

全員に指示を出し終わると俺は漆塗りの鞘に入った紅の糸柄でくるまれた

日本刀を腰に差して演習場に向かう

「つたく何考えてやがる、あの人」

「ほっほっほ、久しぶりだね暁君」

「おひさしぶりです、元帥殿」

「よしたまえ、君と私の仲ではないか」

「演習という名目である以上は、最低限度の礼節は当然です。

今しばらく辛抱を」

「まったく・・・貴殿は真面目なのか違うのかよくわからん奴だな」
そういう元帥殿は笑顔を絶やさずこちらに話しかけてくる
今年で還暦を迎える人とは思えない覇気と威厳を備える彼と話すのは

それだけで気疲れしてしまう

元帥殿はこちらに背を向けて、演習用の自陣に戻っていく

「では、長話をする前に演習を済ませてしまおうか」

「わかりました、お手柔らかにお願い致します」

「ほっほっほ、お手柔らかに？」

こちらに顔だけ振り返る元帥

その顔を見た瞬間、背筋が凍り付いた

「君を相手にそんな加減をするはずないだろう？」

「・・・」

ほっほっほと笑いながら手を振って自陣に戻っていく元帥殿

その姿が見えなくなってからようやく口を開いた

「・・・相変わらず恐ろしい人だ」

「はい、榛名達艦娘でさえ直接できいな手段でもかなわないと

思うほどです」

海軍大本営所属、総帥補佐

それが元帥殿の肩書だ、つまりはこの提督たちの中で3番目に偉い人だ

「怪物あいてだろうが、負けてやる理由はない」

「はい、榛名にお任せください」

「ああ、期待してるよ」

元帥陣営

「さて、確かめさせてもらおうぞ暁君

この先に立ち向かえる力があるかどうか」

演習用特別海域

「では、皆さん今回の旗艦は榛名が務めます」

「」「よろしくおねがいします」「」

今回の編成は旗艦に榛名

ビスマルク、翔鶴、瑞鶴、鈴谷、ヴェールヌイ

という限定海域最終海域クラスの編成だ

新たに姿を見せたのは2人

1人は翔鶴と同じ服装だが慎ましいものをお持ちで

髪は深緑色の綺麗な髪をツインテールにしている

翔鶴型2番艦の瑞鶴

もう1人は綺麗な金色の髪をそのままになびかせ、プリンツと

同じ軍服に身を包み軍帽を被っていて榛名に負けないプロポー

ションを

しているのが服の上からでもわかる

なんでドイツ艦娘って体のラインが出る服着るんだろう

ビスマルク級戦艦、1番艦のビスマルク

どちらも嫁艦だ

「ビスマルク、瑞鶴。急な呼び出しに来てくれてありがとう」

「翔鶴姉と提督さんが呼ぶならいつでもどこでも駆けつけるよ」

「そうよ、わたしもプリンツからへ提督さんが呼んできて〜って聞いたから

駆けつけてあげたんだから、あなたはもう少し自信を持ちなさい」

「そうだな、改めてありがとう二人とも」

俺が2人と話している間も艤装と作戦伝達が行われている

細かな作業や手順は鹿島をはじめとする、演習担当者たちの

仕事だが俺は作戦確認と昨今では珍しい現場に出て指揮をとる。

「ではこれより、作戦概要を通達する。

今回は急遽、元帥殿の訪問による突発的な演習となったため

遠征組を除いた戦力による編成となった。

もつともこの戦力で弱いなどということは決してないが」

俺が笑うと艦娘たちも笑顔で頷く

「陣形は単縦陣、火力で倒す。」

「提督、ぐ質問が」

「どうした榛名」

「艦隊旗艦として進言いたしますが、敵艦隊は

我々以上の機動部隊とか火力戦艦で来ています。

夜戦はともかく、砲雷撃戦による打ち合いは不利になるかと」

「榛名の言う通り、砲雷撃戦での不利は間違いないが

そこはお前たちと俺の指揮能力でカバーする」

「いいじゃん！鈴谷はアリだよそれ！」

「はい、私たちもそれでかまいません、ね、瑞鶴」

「うん！翔鶴姉と一緒になら大丈夫！」

「そうね、私の力を見せてあげるわ！」

「私もそれでかまわないよ」

「榛名、お前の心配は杞憂そうだぞ」

「そうですね、では提督」

榛名の催促とともに艦娘たちが海軍式敬礼を行う

俺もそれに敬礼で返し、刀を抜き放ち宣言する。

「敵は強いが我々に敗北はない！暁の水平線に！」

「！！！！勝利を刻みます！！！！」

こうして暁ハルと元帥の戦いが始まった。

ページ9 戦闘

艦隊同士での戦闘はいたってシンプルだ

空母による索敵から、航空機動隊による航空戦

そのあとに潜水艦による先制雷撃

陣形有利不利からの砲雷撃戦

行動の順番は射程距離に依存する

最後に雷撃戦により昼戦が終了する

その後は夜戦にて航空艦を除いた艦たちによる

攻撃で戦闘終了だ

その結果にて勝敗が決まる

「翔鶴さん瑞鶴さん、敵機および敵艦隊は発見できましたか？」

「まだかかりそうです榛名さん」

「こっちも同じ、全然みつかんない」

艦隊旗艦の役目は現場判断による

艦隊行動の指揮を担うことだ

もちろん航路や陣形指示なんかは提督の指示のもと

行われるが、戦闘中の判断はさすがに

難しいため、その指揮を行う必要がある

それが旗艦の仕事だ

「お二人はそのまま索敵に集中してください

ビスマルクさんは二人の護衛を、鈴谷さんとヴェルちゃんは

私と周辺の警戒をお願いします」

「「「了解」」」

榛名は提督秘書艦であると同時に暁ハル提督の艦娘たちの中でも

最高戦力として数々の深海棲姫や深海棲鬼を撃退してきた。

その実力と実績は並ぶものがない。

まさに提督の最高艦娘として鎮守府で恐れられている。

なによりも優れているのは、その万能さだ

「索敵範囲は正面40度から120度までに飛ばしてください。

横の範囲にいることはまずありませんから正面の索敵範囲の距離

を

伸ばすことに集中してください」

この即応力をもって急拡大を遂げた鎮守府を提督とともに支え
今の地位と設備を鎮守府にもたらしたのだ

この管理能力と危機管理も相まって、誰からも認められる

序列1位、正妻の場所を獲得したのだ。

「提督はどう思いますか？ 敵の初動は」

『榛名の言う通り、側面はまずありえないな

理由は2つ、行動しながら簡単に聞いてくれ』

そして、そんな榛名の力を早くから見抜いた提督もタダ者ではない

『1つは地形、初期位置は互いの正面で固定されている以上は、駆逐軽
巡編成の

高速艦隊でも無い限り回り込むのは不可能だ。

もう1つは今回の目的だな』

「目的ですか？」

『ああ、今回の元帥の訪問が突然だったのは

俺たちの緊急時の対応力を見るためというのが俺の推測だ

そうしたら次は力が見たいはずだ、あんな任務を言い渡す以上

それなりの力がないといけないだろうからな、自衛くらいはできな
いとな

だから正面からぶつかって力を試したいんだろうさ』

「根拠は先ほどのさつきですか？」

『ああ、加減しないと行ったからには本気で潰しに来るぞ

翔鶴瑞鶴は、索敵から攻撃機に換装を変えろ、榛名、ビスマスクは

至近弾で十分だから砲撃用意、残りは弾だけ込めて射程距離まで回
避専念

まもなく来るぞ!!』

提督が言った通り索敵機に反応があり。五航戦はすぐさま発艦

同時に榛名とビスマルクもけん制弾を撃ち始めた

「!!? 敵艦隊すでに発艦！ 砲撃も開始しています！」

『すぐに航空機にて応戦せよ！ 砲撃は射程範囲内でのみ許可する

！』

「了解！」

元帥は素早く艦隊を立て直すと、迎撃の命令を出す

このあたりはさすが歴戦の猛者だがとうの本人は険しい顔をしていた

「空母3、戦艦3の超火力だからこそその先制はわかるがね

少なくともこちらのほうが艦が多い分索敵も有利なはずだが……」

「元帥提督！ 敵艦隊が射程外にも関わらず砲撃してきます！」

そのせいで海面が安定せず、十分な数の艦載機が出ていません!!」

『ちい！ 小僧が！ かまわん！ 出ている分で迎撃し、すぐにこの場を離脱！』

海面の安定が確保され次第、全艦発艦し空から敵を攻撃せよ！」

「了解！ 離脱開始します！」

通信が切れ、元帥は息を吐く

「さすがだ、暁提督。この狭く見通しのいい場所で見事

奇襲を仕掛けて見せた。だが砲雷撃戦までのわずか数十秒で

どこまで攻撃できるかな？」

「つち！ 化け物爺め、完全に不意を突いたはずなのにもう離脱してやがる」

「いかがしますか？ 提督」

「……榛名！ このまま急接近して砲雷撃戦に持ち込む！ T字有利になるように」

接近しながら攻撃を続けろ！ 艦載機を中心にお前たちは副砲で

援護だ！

翔鶴！ 瑞鶴！ 打ち尽くしてかまない！ 一人でも多く倒せ！」

「了解です！ 榛名、追撃を開始します！」

「ふう、ここからは榛名お前に任せるよ」

「お疲れ様です、提督どうぞ」

「ありがとう大和」

渡された飲み物を一気に流し込む三分の一ほど飲んだら

大和が不思議そうな顔をしてこちらを見ていた。

「どうかしたか？」

「あ、いえ提督がいつもこんな風に指揮を執っていたのかと

思い、つい見入ってしまった」

「ああ、なるほどな。まあ確かに通信機越しだと厳しい声しか
わかんないもんな、実際はこんなもんだよ」

「でも、さすがですな作戦の発想といい戦略といい

なによりもこの艦隊指揮はすさまじいです」

暁ハル提督の特徴は艦隊運用指揮と

鎮守府管理という大雑把な特技だ

だがその内容は元帥や大本営から目を付けられるほどすさまじい

ひとたび艦隊指揮をとれば勝利のために必要な戦略と戦術を

ボスまでの運用からボス戦の特効対策と道中、目標撃破との

全作戦を考え実行できる力

そしてそのための基本となる、鎮守府の改善と運用は

建造開発スケジュールから、設計図回収、資材増加のための遠征サ

イクルと

運用管理もできる、まさに統治者としての才能を彼は持っていた

「違うよ大和」

「え？」

「結局はそれを細かく管理して指示できる現場の人がいないと何の力
にもならないよ

だから本当にすごいのは艦娘のみんなだ」

「提督……」

「だから俺は信じているのさ、こんな俺に力を

貸してくれるみんなの力をね」

「きやあー」

「翔鶴姉?! このおー」

瑞鶴の飛ばした艦載機によって敵空母が1体大破、行動不能になっ
た。

陣形は引き分けとなり、互いに影響なし

航空戦によって敵空母が中破になったが装甲空母のため行動可能

砲雷撃戦となり、たった今敵の艦載機により翔鶴が中破となった
こちらも装甲空母のため攻撃はまだ可能だが、攻撃力の低下は痛い
「よそみとはいいい身分ね!」

榛名を襲う戦艦の砲弾だが榛名はそれを踊るように回って回避す
る

「な」

「榛名、全力で参ります!」

至近距離からの主砲砲撃

いくらか同じ戦艦とはいえ、これは一撃だ

〈これで2隻!〉

空母と戦艦をそれぞれ1隻ずつ撃破した、これは大きい

〈けど、まだ2隻ずつ残ってる……油断は禁物ですね〉

《さすが、暁提督の最強艦娘ですね榛名さん》

「!……金剛さんあなたが艦隊旗艦ですね」

《はい、そちらは当然あなたですね》

「あなたが出てくるなんて……元帥様は本気で来ているんですね」

《はい、わが提督は暁提督の本気を見たがっています》

「期待には応えられていますか?」

《それはもう、十分すぎるほどに》

会話をしながらも、お互いに相手のスキをうかがっている。

この距離で互いの艦隊最強戦力同士がぶつかればタダではすまな
い

そうして戦意が高まっていくなかで、ふと金剛が笑い始めた

《フッフ、いいですか? 私ばかりにかまっています》

「どういうことでしょうか」

「あなたさえ抑えられれば、地力差で勝る私たちが

火力で抑えられます、そうすれば夜戦に持ち込む前に私たちが

制圧するのは不可能ではないです」

「いくわよー!! ファイヤー!!」

ビスマルクの砲撃によって敵空母が一体倒された

「甘い! 貴様一人で勝てるほどわが艦隊は弱くない!」

「な!!? 空襲ですって!!」

「きゃああああああああああああああ!!」

「翔鶴姉!! うあー!」

ビスマルクが敵戦艦を倒している間に

艦載機を飛ばして翔鶴と瑞鶴を中破大破に追い込んだ

「おのれ!! よくも!!」

「ビスマルクさんスト——プ!!」

ビスマルクが反撃をしようとしたところを

鈴谷がヴェールヌイを連れて止めに入る。

「鈴谷! じっくりよー!」

「悪いけどいったんひかせてもらおうよ」

ビスマルクに接近していた戦艦に連撃を叩き込み小破へ

すれ違いざまに煙幕をヴェルが使い、退路を作り出す。

「くう! 煙幕など! ござかし」

「翔鶴姉の仇」

「な——」

敵戦艦の真後ろに瑞鶴が弓型発艦機を構えていた

振り返った瞬間うち放ち、中破まで強引に持っていく

「ぐつつう!! よくも!」

砲撃を至近距離の場所へうち煙幕を晴らす

すでに鈴谷たちの姿はない

「つち! 空母部隊はすぐに索敵を!」

敵が足並みをそろえる前に叩き潰します!!」

「ふい——、何とか巻いたねー」

「ダンケ、スズヤ。あのままだったら私も……」

「いいって別に! それよりも」

「今後どうするかだね」

ヴェルの発言とともに各々が考え始める

「瑞鶴さんはどこまで戦えそう?」

「……正直に言うとう無理そうねさっきの攻撃が精いっぱい反撃だった」

「あり・がとうね……瑞鶴」

「翔鶴姉……」

「ごめんなさい、私が1人追いかけてなければこんなこと」

「ビスマルクさんのせいなんかじゃ」

「はいはいはい！ 反省は後でにして今は」

「このやばい状況を何とかするのが先決じゃん？」

鈴谷が次期嫁艦の抜擢理由は重巡として旗艦を務めてきた

キャリアと実績もある、火力のプリンツ。指揮の鈴谷と

重巡2枚看板として暁提督に貢献している。

『さすがだ鈴谷、この短い間によく立て直した』

「てーとくじゃん!? 榛名さんのほうは無事!？」

『ああ、敵旗艦金剛改二丙と正面から戦っているよ。いくら榛名でも無事では』

「すまないだろうな。だからここそこでの勝敗が今回の演習の勝敗を分けるぞ」

「アドミラル……ごめんなさい」

『ビスマルク、反省は後だ。いいな?』

「はい」

『よし、まずは状況を状況を整理する』

翔鶴が大破、瑞鶴が中破。残りは小破だな?』

「うん、で瑞鶴さんはもう攻撃するのはきついつて」

『攻撃は可能だが敵のほうが早いからだな、素晴らしい自己判断だ』

「別に……提督さんに褒められたって／＼／＼」

『ここからの砲雷撃戦はかなり不利だな……』

「さて、どうしようか……」

艦娘たちが次の指示に期待しているのが連絡機越しでも

感じ取れる。そうだ俺の役目は勝利をみんなに見せること

そのためなら、なんでもしてきた。今回も

『何とかするか……これより作戦を言い渡す』

「おや? 正面に反応?」

先ほど煙幕で撤退した鈴谷たちが今度は正面から現れようとして

いる

「いい度胸ね!! 砲雷撃戦用意!!」

「あっちも気づいたみたいじゃん、砲撃戦用意!」

互いに狙いを定め、戦場にはさつきが満ち溢れる。

「てええええええええええ!!」

号令とともに打ち合いが始まった

「フツ空母がいない貴様らに何ができる!

空母部隊! 発艦!

「きたじゃーん! みんな回避!!」

空母の迎撃ができない鈴谷たちはとにかく回避するしかない
なんとかかすり傷で被害を抑えながら回避していくが

敵は空母だけではない

「回避で精一杯ね、格好の的よ!」

戦艦の主砲副砲の連携攻撃がビスマルクに直撃する

「きゃあ!!、いけない!? 雷撃装置が!!」

「マジ!?!」

「隙です」

鈴谷がビスマルクの報告に気を取られた瞬間

敵空母の艦載機が砲弾の隙間縫うように鈴谷の頭上に迫る。

〈やっぱ………ていとくマジ(めん)〉

鈴谷はぎゅっと目をつむりその時を待つ

轟音

しかし、鈴谷の体にはなにも変化が起きない

おそるおそる目を開けると深緑の髪が映った

「!!? 瑞鶴さんなんで!!?」

「勝つために決まってるでしょ! 今よ!」

瑞鶴の言葉にすぐに反応し、主砲で連撃叩き込む

敵空母は完全ではないが大破に追い込んだもう攻撃できないだろ
う

互いの空母はもういない

「瑞鶴さん……」

「なんて顔してんのよ……謝るくらいなら勝利報告のほうが助かるわ」

「……とーぜんじゃん！ 必ず勝つから」

「それでいいのよ……じゃあ……あと任せたわ」

瑞鶴も離脱したが、こちらは榛名を含めて4隻に対して

あちらは2隻、戦況はこちらが有利になった

「よし！ じゃあこのまま——」

「このまま倒しますね」

ふと背後から声がした瞬間には鈴谷は轟音とともに吹き飛ばされていた

「鈴谷さん!? そんなここは?!」

榛名が金剛と戦っている最中、金剛が緊急離脱を開始

追いかけた榛名が見たのは金剛の主砲を至近距離で受ける鈴谷だった

一撃で倒される鈴谷をみて、急ぎ榛名は金剛と戦闘を再開する。

それと同時に、なぜ離れた場所で戦っていた鈴谷たちがここにいるのかも

「金剛さんあなたたちはまさか」

「さすがですね、もう気づいたんですか」

そう、離れた場所にいるなら合流すればいい

そうすれば連携が取れて戦況も変わるのだから、その方法こそ

元帥の仕掛けた罠だ

「戦いながら誘導されていた、ということですか」

「ああ、あの爺さんはやつぱすごいよ」

そう元帥側の艦娘たちは元帥の指示のもとそれぞれの位置を確認して戦いながら合流を果たしていた。

暁提督と榛名達が気づかないレベルのわずかな移動を

少しづつ行って

「それも砲雷撃戦や空襲によって完全に目の前の敵に

集中しているタイミングまで計算してな」

「それが金剛さんの奇襲につながったと」

「まったく……. どんだけ修羅場くぐってんだよ

考えたからって出来るもんじゃないぞ……. けどまあ今回は
作戦勝ちだな、何とか間に合った」

「きゃあ!!」

「ビスマルクさん!」

金剛は味方の戦艦と協力し、一瞬の間に榛名と相手を変え
中破のビスマルクを完全に沈黙させる。

「あなたの相手は榛名です!!」

「いえ、ここで私が相手をします!!」

金剛に迫ろうとするが相手の戦艦が立ちばかり相手ができない
時間ばかりが過ぎてゆく

そうこうしているうちに夜戦に切り替わり最後の砲撃になる

「これで終わりです!」

榛名の一撃は金剛へとすいこまれていくが

ここでも残った戦艦が金剛をかばって大破した

「そんな!」

「こんづ……. うさ……. んあとは…….」

「ええ! 勝利は提督の物です!!」

金剛の夜戦カッターインが炸裂しなすすべなく榛名の胸に吸い込ま
れていく

「あ…….」

榛名大破

完全ではないが十分なダメージだ

「惜しかったですね、榛名さんもしあの奇襲に気付いていれば
結果は逆でした」

「……. ……ふふ、そうですね」

榛名は膝をつきながら不敵な笑顔で金剛を見る。

その顔に警戒して周囲を探ったときにはもう
彼女が魚雷を構えていた

「!! まさか最初から!!」

「はい、そのためにずっとみんなを守っていました

演習での損害が僅差の場合旗艦ダメージの総量で勝敗がきまります。

私が少しでも残れば彼女があなたを沈めます」

「でも、あなたは私と戦っているとき！ おとすつもりで本気で戦っていたわ！」

「当然です、それで私があなたを倒せばよし、それがだめでも大丈夫
最悪の場合は私と彼女が残ればあなたが1人で戦術的勝利で勝ち
です

これが暁 ハル提督の戦いです」

「……お見事です」

金剛は満足そうに眼を閉じるとその体を最後に残った

ヴェールヌイに向けた

「私たちの勝ちだ」

ドンッと装備全てを魚雷にした夜戦スナイプ特化の

彼女の攻撃は金剛の残った耐久をすべて持って行った

2―0にてこの戦いは暁ハル提督率いる艦隊の勝利となった

ページ10 事件

「はっはっは！まさかあそこから負かされるとはね！」

「俺としても一か八かの作戦でした、あそこで金剛さんが

合流したときは、ヴェルを攻撃されないようにと願うばかりでした」

「そうか、かの暁提督に冷や汗を出させたなら満足だ」

場所は執務室に戻り、応接用のソファに腰掛けている

あのあと、艦娘たちは親睦会ということで入渠室の温泉で

ガールズトークをしているらしい

演習だけは、普段の出撃と違って終了後ダメージが回復する
そのため回復目的ではなく純粋な交友会として使用を許した
なによりもここから先は機密事項になるからだ

ここには元帥と俺、秘書官の榛名と金剛の四人だけだ

「それでは元帥、今回の急な訪問の理由をお聞きしてもよろしいですか？」

「おっとそうだな、金剛君。資料の準備を頼むよ」

「お任せね」

「榛名、悪いけど誰も聞けない、入れないようにしてくれ」

「はい、了解しました」

秘密の話をするための準備を終わらせて本題に入る

「まず、今回の急な演習についてだがこれは暁提督の想像通り

君たちの今現在の戦力と対応力を図るためだ。

榛名君をはじめとする艦娘の皆さんにはご迷惑をおかけした」

「そんな、逆に榛名達にとっても有意義な時間を

過ごさせていただき感謝しています」

「そういつてくれて助かる、だがこれは

あくまでもついでに過ぎない」

「本題は別ですか、それも自分たちの力を

確認しなければならぬほどの」

「うむ、先に送った任務通達の本当の目的について

話すために、今回の急な訪問となった」

元帥は身体を応対用ソファから体を起こすと

演習前と同じ歴戦の猛者の顔つきになって話し始めた

「大本営には世界を守るといふ使命と、海の秩序を取り戻すといふ至上命題があるが、これはあくまでも建前という意見もあるのが現状だ」

元帥の言う通り、大本営に所属するすべての提督や艦娘たちが善良というわけではない

提督になった者たちの中には、艦娘の力を悪用しようとする者や艦娘を自分の都合のいい道具だと思っている人間もいる

そんな提督たちがいる現状において艦娘たちが人間に交換など持てるわけはなく

場合によっては提督式の無視や命令違反などは当たり前などということもある

「君も知っての通り、この建前がなくては艦娘を組織的に運用する大本営の

大義名分がなくなり、艦娘たちの人権が危うくなるだけにとどまらず、組織そのものが

世界にとつて脅威になるかもしれん」

「そのための建前と徹底管理ですからね」

「その通りだ、だが組織である以上ある程度の拡大と僅かでも確実な悪意が発生するのは必然だ。そしてついに大本営に1つの問題が

起きた」

「問題ですか？」

「うむ。悪意を持った提督たちが世界首脳陣に対してクーデターを画策しているらしい。艦娘たちを使った戦争をな」

『なー———!!!』

俺と榛名の声が重なる。クーデター？戦争？

あまりの突拍子もない話に思わず思考が停止しかけるがさまざまな疑問が

頭の中によぎっていく。

そもそもなぜクーデターなんかを起こそうとしているのか
なぜ艦娘たちが自らの存在を危うくするような行動をおこなうの
か

疑問に対する答えを求めるように元帥のほうに顔を向けると
わかつているというように頷く

「君の疑問は想像がつく。しかしここからは私の憶測がはいるぞ？」

「かまいません、どうか聞かせてください」

「そうか、ではまず動機だが、これは2つあるだろう」

1つは今までの艦娘たちの不満と提督たちの不満が噴出し、互いに
世界陣にたいして反撃したいがために手を取り合ったのだろう
組織である以上はこういったものはつきものだからな」

「それについては自分もわかりませんが、その場合は大本営に敵意が向
かうと

思うのですが、いったいなぜ世界に対して？」

「彼らの願いは世界に対して自分たちの存在と価値を認めさせること
だ

われら大本営はむしろ肯定派だからな、我らも巻き込み世界を相手
にする際に

強制的に自陣に引き込ませるためだろう」

「なるほど、大本営を巻き込むことで無理やり戦争に参加させたいわ
けですか

さらに大本営に敵意を向けさせれば自分のような艦娘を大事にし
ている提督たちは

自分の仲間を守るために戦うしなくなる」

「その通りだ、そして2つ目……というよりもなぜこんなことにな
ってしまったのかというそもそもの原因についてだな」

そう、1つ目の理由については俺も考えればわかるものだったが
どうしてそこに思い至ったのかは全然わからなかった

そんなことをすれば自分たちの立場がなくなるのは提督たちも艦
娘も

同じリスクを背負うことになるし、すでに鎮守府という居場所があ

る

時点でわざわざクーデターを起こすほどの不遇の扱いがあるわけでもない

もちろん、世界の首脳陣や偏見を持つ一般人からみたら艦娘は未知の生き物

だと思おうし、一緒に暮らす提督たちも……

「……ま……まさか」

「提督？ わかったんですか？ こんな無謀を行う理由が」

「……榛名……もし俺たちのこの結婚が世間的に大きく広まったらどうする」

「え……それは……!? もしかして!!」

「どうやら2人とも気づいたようだね」

元帥は肘をつき、手を組むとその上に顎をのせる

「どこから漏れたかは置いておくが、我らのその関係を外の人間は

かんたんには認めてはくれないだろう。ましてこのSNSが普及した時代だ

好き放題自分の言いたいことをいう輩がいる。それで傷つく人間がいるとも考えずにね」

「……そういうことかよ……!!」

元帥の話聞いていた俺は思わず本気でこぶしを握っていた

ようするに、俺たちみたいな提督と艦娘の仲を外の人間がどこからか

聞きつけ、それをネットで好き放題言ってくれたのだろう。誹謗中傷の数々を

提督の中に前述の記録にある通り、駆け落ちを実行してしまうほど艦娘を大事に

している者たちもたくさんいる。俺もその1人だし榛名も俺となら一緒に逃げてくれるぐらいに

思いあっている。そんな大切な存在をよく知りもしない第三者が好き放題言っているのを

見てしまったら？ 愛した人たちのために戦いを挑むなどよくある

話だ。

愛する者のためなら何を犠牲にしても一緒にいたいと願うのが人という生き物だ

愛は簡単にに憎しみという怪物に変わる

「提督…お気持ちは痛いほどわかりますが今はどうか…」

榛名にそっとこぶしを握られて自分がいまだだけの力で握りしめていたのか

ようやく気付いた。手のひらには爪が突き刺さり皮膚から紅の雫が床に向かって点を

作っている。「ごめん」と謝りながら手のひらを開くと榛名は優しく首を横振りしながら

手当を行ってくれる。そんな姿を見ているとますます思いが募る。守りたいと考えてしまう

「偏見や憶測が生んでしまった悪意が今回の事件の発端だよ」

「……自分の鎮守府は大本営。ひいては鎮守府のイメージアップのため
の
道具ではありませんよ」

「当然だとも、今回の記録任務は私の独断だ。それが極秘扱いの理由なのだから」

俺はうつむいていた顔を元帥に向けると元帥は真剣そのものの顔でこちらを見ていた

「この件が本格的に広がってしまったては誰にも止められなくなってしま
ま
う

そのまえに艦娘と提督が暮らしている鎮守府というものが無害であり、決して

憶測のようなことはないと証明しなくてはならない。私の知る限りで

世間からみても健全で仲睦まじく、同情を誘うような運営をしている提督は

君しかいないのだよ。暁君」

元帥の言い通り、この件をなんとか解決するには実際の現実的な光

景を

見せてやるほかない。根も葉もないうわさに対しては、確たる証拠か

ほとぼりが冷めるまで静かに暮らすしかないのだ

そのなかで元帥が信頼できるほどの鎮守府管理を行っているものは

何人かいるが運営能力だけではたりない

「状況打開を考える以上は、最低限の自衛手段は持っていないと話になりませんからね」

「そういうことだ」

元帥は本題について話し終えたからかソファにもたれかかって休んでいる。

まさかこの極秘任務がここまで重要なものになるとは…

提督と艦娘の人権と名誉をかけたクーデターが水面下で起きていること

現状においての世界と世間の艦娘と大本営にたいしての態度

細かく上げればやまほど不安事項は出てくるけど、まあ結局は

「いつも通りにすごせばいいだけです、了解いたしました」

「…すまないね、めんどろな役割を任せてしまって」

「お気になさらないください、それよりも一つお聞きしたいことが」
「なんだね」

瞬間。部屋の空気が燃えるような感覚に包まれた

榛名ははつとして提督を見る。元帥の秘書金剛は元帥を守るように立ち

元帥は演習の時以上の険しい顔つきで相手を見据えている

金剛は顔から大量の冷や汗を流しており、元帥も一筋の汗を伝わせている

ハル提督は先ほどから抑えていた怒りと殺意を開放しながら質問を重ねる

「もしクーデター側から接触があった場合は容赦できませんが
それでもかまいませんね？」

「ああ、可能な限り生け捕りにしてくれば君の自由にしている」
「ありがとうございます」

頭を下げるのと一緒に部屋の空気も戻っていく
それを感じ取って元帥は金剛を下がらせる

榛名は提督を心配そうに見つめながら一緒に頭をさげている
「今回はこれで失礼させてもらうよ、わからないことや気づいたことがあれば

いつでも連絡をくれたまえ、ではいこうか金剛君」

「お、OKネ、また遊びに来るね」

「ご足労いただきありがとうございます、榛名」

「はい、お見送りしてきます」

バタン

元帥は要件を伝え終わると金剛とともに帰っていった
もどってやる人が多いのだろう。

極秘作戦ともなれば根回しから偽装工作とやらなければ
ならないことは多い

まあ、そこについては俺は関係ないが

なにがあるうと特に変なことをするわけではない
ただいつもどおり過ごすだけ

「そう、いつもとおなじようになにかあれば対処するそれだけだ」

暁提督は窓に映る夕日をみながら1人つぶやく

「榛名君、忠告しておこう」

「え、な、なんででしょうか？」

提督に言われて元帥様を見送っている道中いきなり話しかけられ
て

戸惑いながらも聞き返す榛名

「暁君だが、前にあった時よりもずいぶん鋭くなったね。まとう霧
囲気という

やつが相当の実力者のものだ」

「はい、提督も私たちとともいくつもの限定海域を攻略していますか

ら

「うむ、若い世代が力をつけてくれるというのはうれしく思うが同時に

危険でもあるんだ」

「危険ですか？」

「うむ：彼も人間である以上は今回の事件の原因と同じように暴走するかもしれない」

「!?提督はそんなこと!!」

「かもしれない。という段階だよ榛名君。しかし今の君の反応をみると心配はしておくべき

かもしれないな。暁ハルという人物は今回の事件の動機にもっとも共感できる人間だからな」

「：はい、仰る通りです」

「まあ、あんなことがあれば当然だが、だからと言ってその感情を簡単に

認めるわけにはいかん、あんな目をしている彼は初めて見たがあれはまずい

あれはすべてを覚悟している者の目だ」

「覚悟：」

「うむ、一歩間違えば世界も犠牲にしてしまうほどのな

だから榛名君、暁提督のことを頼んだよ」

真剣な表情からやさしく榛名にほほ笑む元帥を見て榛名は自信に満ちた顔で頷いた

「はい！提督は榛名にお任せください！元帥様ありがとうございます」

「いやいや、年よりのお節介で不安にさせてすまないね、なあに君たちの

その愛情とやさしさがあれば万が一にも乗り越えられるだろうよ」

元帥は顔を上げて水平線を照らす夕日を眺める。

暁の水平線に移す瞳はやさしさに満ちた温かいものと

冷たい覚悟に満ちた冷たいものがあつた